



基本構想(お茶のまち静岡市100年構想)



100年構想の必要性

本市において、お茶が産業として深く関わってきたのは、明治時代以降のことであり、輸出拠点が横浜港から清水港に移ってから、加速度的に拡大していくこととなりました。葵区安西にはお茶の再製工場が次々と建設され、横浜や神戸の外国商社の多くも支店を置くようになったことから、国際商業都市としての様相も呈することとなりました。加えて、お茶の輸送のための静岡と清水とを結ぶ軽便鉄道(現在の静岡鉄道)の開通は、関連産業を興隆するとともに、都市化を促進し、生活環境の質的な向上に寄与しました。

しかしながら、現在、お茶を取り巻く情勢は大変厳しいものがあり、激しく変化する環境に的確かつ迅速に対応することが求められています。

こうした中で、これからも本市のお茶が産業として栄え、日常の生活や文化の中にお茶が生き続け、誰もが感じる“お茶のまち”であり続けるためには、場当たりの対症療法ではなく、歴史に学びつつ遠い将来を見通したビジョンを描き、それを羅針盤として着実に歩みを進めていくこと、次代へと思いを繋げていくことが必要不可欠です。

時代とともに人々の生活は変化し続けますが、本市において急峻な山々で営まれるお茶づくりは、簡単に形を変えることができるものではありません。だからこそ、百年という長いものさしで状況を俯瞰し、時代という大海原の中で荒波を受けても行き先を見失うことのない、わたしたちの心の目印ともなる羅針盤が必要なのです。

基本構想は、100年後の「お茶のまち静岡市」が目指す姿と基本的な方向性を定めるものであり、第1次計画に引き続き、同様の内容を定めます。

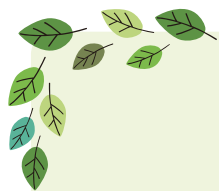


清水区吉原



100年後の「お茶のまち静岡市」を目指す姿

(1) お茶のまちづくりの理念



交わり、学び、伝え、創ろう



先人が、脈々と作り続けてきたお茶。その努力によってお茶は、静岡市を代表する地域資源となりました。その価値をさらに高め、後世に伝えていくことは、現代を生きる私たちに課せられた責務ともいえます。

お茶の歴史や文化を次代に伝えつつ、先人の知恵に学びながら、お茶を作る人、伝える人、楽しむ人が交流・連携し、時代の要請に合った新しいお茶の価値や魅力を創造していくことが重要です。

そこで、世代が変わっても変わることのない、本市におけるお茶のまちづくりの理念として、「交わる」・「学ぶ」・「伝える」・「創る」を掲げます。



交わる

お茶を作る人、伝える人、楽しむ人が、もっと交流・連携することにより、お茶でまちが活性化します。また、産地と市街地、さらには市内外の人々が、互いに持つ資源や思いを起点に交流することで、まちに大きな流れを生み出すことができます。



学ぶ

お茶は、人と人を取り持ち、人の心を癒し、人々の健やかな毎日を支える大切なものです。作る人、伝える人、楽しむ人もお茶の持つ神秘の力を学びます。また、お茶を育て、作り、人々に届けていくこと、この繰り返しを将来にわたって引き継いでいくためには、そこに携わる方自らにも学びの姿勢が必要です。



伝える

先人が築き上げてきた茶産地・お茶のまちとしての確かな記録や、お茶作り・まちづくりへの思いを確実に継承することが必要です。また、お茶を取り巻く歴史・文化・産業・学術・観光なども併せて後世に伝えていくことが必要です。



創る

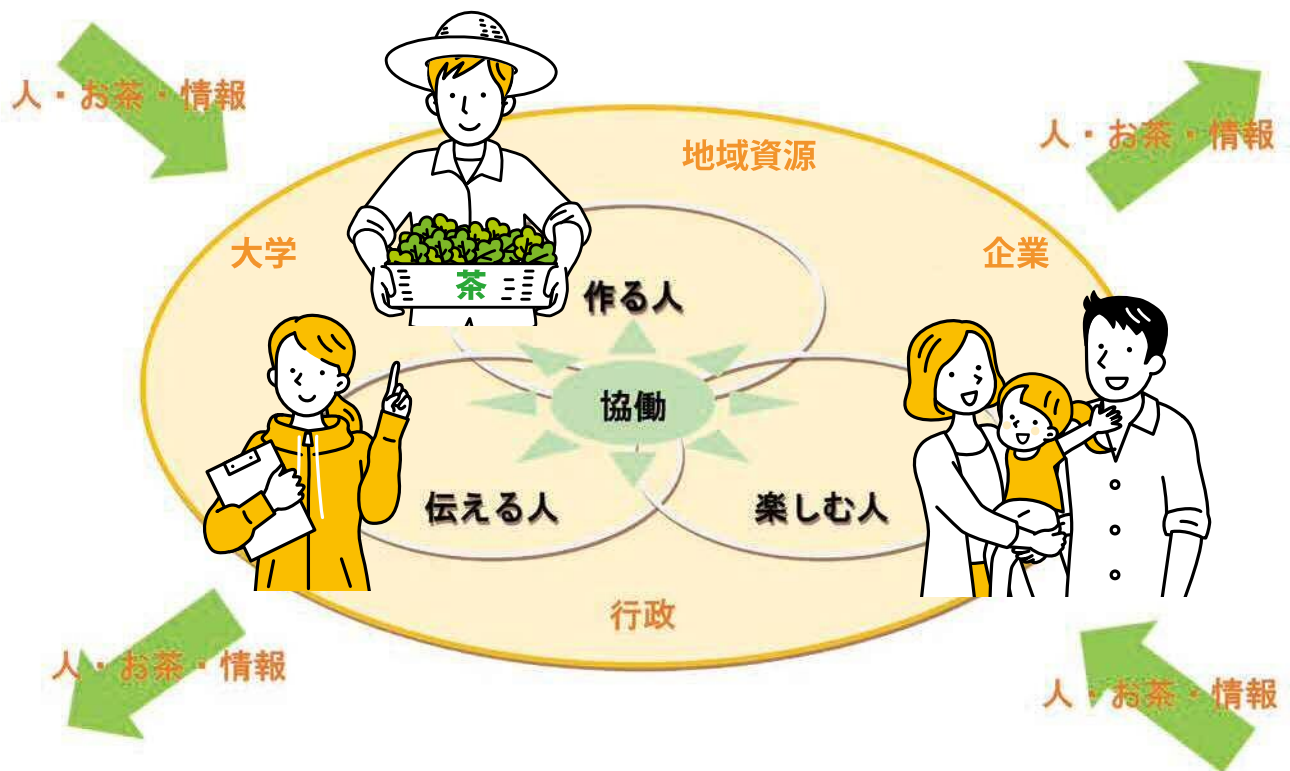
社会の状況や私たちの生活は、日々変化しています。リーフ茶需要が年々減少する中、茶業関係者が互いに知恵を出し合い、いつの時代も人々の暮らしに密着する、新たなお茶の姿、お茶のある生活を創り上げていくことが必要です。

(2) 目指す「お茶のまち静岡市」の姿

世界中の誰もがあこがれるお茶のまち

静岡市は、良質でおいしいお茶を作る産地としてその名を知られるようになり、国内の他産地からもお茶が集まり消費地へ送り出す集散地ともなり、名実ともに日本屈指の茶どころとしての地位を確立することができました。

これからは、こうした先人の志や技量を継承しつつ、作る人(茶農家や茶問屋)と楽しむ人(市民)、そして両者をつなぐ伝える人(茶問屋や小売店、日本茶インストラクター)の協働により、魅力あるお茶づくりは無論、さらに、お茶を通じた心やすらぐ生活空間があり、笑顔を求めて人々が集まってくるまち、そして、まちの内にも、まちの外とも、人・お茶・情報の交流が絶えることがなく、その交流がまた新たな笑顔を生み出していく— そんなお茶を通じた新たな価値が次々と創造される“お茶のまち”を目指します。

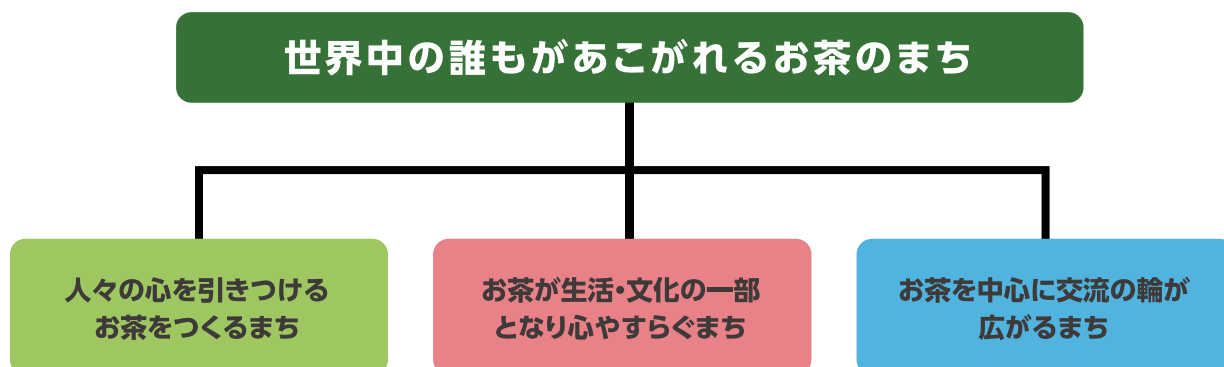




3 将来像に向けての基本的な方向性

100年後の将来像「世界中の誰もがあこがれるお茶のまち」に向けて軸となる3つの柱を次のように定めます。

全体像



(1) 人々の心を引きつけるお茶をつくるまち

茶農家や茶商の洗練された技術に消費者としての市民の力を組み合わせることで、地域の個性を活かしつつ市民も自慢したくなるようなお茶が次々と生み出されるお茶のまちを目指します。

特に、中山間地域は、これまで地理的特性から生産効率が低く、出荷時期も遅いことで、高品質であるにもかかわらずその価値が価格形成や茶業経営に反映されない傾向もありましたが、市民自らが自慢したくなるお茶づくりが広まることによって、市場流通の中に埋もれることのない価値を生み出すことができると考えます。

(2) お茶が生活・文化の一部となり心やすらぐまち

経済発展の代償として現代に生まれたストレス社会や生活習慣病、ゆとり時間の喪失など、これから私たちや私たちの子や孫が迎える時代は、自然環境の変化や生産人口が減少していくことなどから、より心理的な負荷が高まることも予想されます。

だからこそ、先人が見出し、代々受け継がれてきたお茶の持つ様々な力 ―「人々の心を癒す力」、「人々の健康を育む力」、「人々の心を繋ぐ力」― を100年後も享受できるよう、これまで培われてきた茶文化や歴史の未来への継承や、マーケットインの発想に基づく新しいお茶のある暮らしへの創造、次代の担い手であり、継承者としてお茶の持つ魅力・伝統・文化を子どもたちに伝えることに取り組み、いつの時代も常にお茶を身近に感じられるような風土づくりに取り組むことが重要です。

(3) お茶を中心に交流の輪が広がるまち

お茶は人々の喉を潤してきたばかりでなく、家族の会話を生み、大切な友人をもてなし、心と心をつなぐ大切な役割を果たしてきました。茶道から生まれた一期一会の心は、決して茶道という特別な世界だけのものではなく、私たちの生活のありとあらゆる場で生きるものです。毎日顔を合わせる家庭でも、学校でも、職場でも、同じ場面は二度とありません。だからこそ、その時の出会い、場面に一生懸命相手に尽くそうとする心、それが一期一会です。

世界で一番、一期一会の心が深く、広く染み渡ったまちづくりを進めることにより、お茶を介したコミュニケーションが次々に網の目のように広がり、内外との交流活動が生まれ、経済活動が盛んなまちを目指します。



令和4年度静岡市「お茶の日」ポスターコンテスト

テーマ:お茶のまち静岡市の未来

小学生低学年部門

最優秀賞

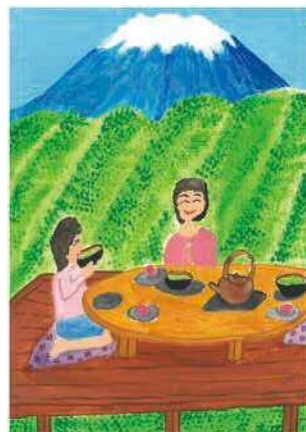
「お茶をしょうかい」



小学生高学年部門

最優秀賞

「さわやかな茶畑の中で」



中学生部門

最優秀賞

「お茶はふるさとの味」

